

記念誌発刊にあたって

菅茶山顕彰会会長 藤田 卓三



2022年度茶山ポエム絵画展は、創設30年第30回記念の絵画展です。また、主催が菅茶山顕彰会主導の実行委員会から菅茶山記念館に交代し、顕彰会は共催団体として共に歩んで10年の節目でもあります。

3年続くコロナ禍中ではありますが、今回の応募作品数も3,200点を超えるハイレベルが続いており、作品評価も高いものです。子ども達の創作意欲を讃え、ご指導いただいた先生方に感謝するとともに、絵画展を主催される菅茶山記念館並びに、絵画を審査いただく神辺美術協会にお礼申し上げます。

創成期の文献には「茶山の詩を子ども達に伝えたい。子ども達に茶山を親しんでもらうために、茶山詩を現代語訳し、詩をイメージした絵を描いてもらって展覧会を始めた」とあります。これが順次発展し、今では代表的な茶山顕彰行事として地域に定着しています。

菅茶山顕彰活動は時代や世代の交代により変化進展してきましたが、茶山ポエムが菅茶山と子ども達をつなぐ大きな架け橋であることに変わりありません。茶山ポエム絵画が子ども達に自然・風物への関心を高め、想像力を育てる教材になり、絵を見る大人達にも茶山の心を届けるものであると信じています。

第30回記念として「温故知新」の教えに習い、絵画展の継続発展を願って、茶山ポエムとは何か、ポエム絵画展の軌跡と現状をまとめた記念誌を発行することにいたしました。特に、今までに創作された「茶山ポエム」とその代表的な「ポエム絵画展作品」をできるだけ収録しました。先人たちの業績を表し、今後の菅茶山顕彰活動に役立てていただきたいと考えています。

茶山ポエムは児童の絵画に止まらず、大人の創作分野にも広がり、茶山を顕彰する機会となっています。音楽家奥野純子氏の「茶山詩を歌う」活動や、6年前の「茶山ポエムART&MUSIC コンクール」(主催：茶山ポエム神辺創成の会)で公募されたイラスト・絵画・書や音楽などは、その先駆的な事例として記載いたしました。

この冊子が地域の皆様には菅茶山、茶山ポエムを知っていただく手掛かりになり、絵画展関係者の方々、すなわち学校の先生や子ども達、作品審査員、絵画展当事者、更には後援諸団体の皆様のご参考になることを祈念いたします。

終わりにになりましたが、冊子発行に全面協力いただいた菅茶山記念館様、ご助成いただいた一般財団法人義倉様、寄稿や資料提供などを頂いた皆様に厚くお礼申し上げます。

「茶山ポエム絵画展」30周年記念誌によせて

菅茶山記念館 館長 原田 一敏



「茶山ポエム絵画展」は30年目を迎え、本年度で第30回記念となります。

この絵画展は当初、菅茶山顕彰会の主催で始まり、菅茶山記念館へと引き継いで10年目となります。これもひとえに礎を築いてこられた、菅茶山顕彰会をはじめ、学校関係者の皆様方、本展関係者の多大なるご支援の賜物であり、忠心より厚くお礼申し上げます。

さて、本展の大きな目的は、地元・神辺町の生んだ偉人、菅茶山を敬い、その功績を称えることにより、その詩から子供たちが身の回りにある自然や風物に目を向け、自身の感動を絵に描くものです。私たち大人が忘れてしまった感性で描かれた絵も多くあり、想像力の向上につながる素晴らしい事業と考えています。

ここ数年、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、子どもを取り巻く環境も大きく様変わりをしています。

このような状況のなかでも、多くの作品が応募され、子どもの豊かな表現力に感銘を受けています。これも教育関係者や保護者の皆様方の絶大なるご協力のおかげと、この場をおかりしまして、感謝申し上げます。

この記念の年にふさわしい、純粋に気持ちにあふれた作品を当館、福山市役所および、かなべ図書館などで多くの皆様にじっくり御覧いただきたいと願っています。

今後も菅茶山顕彰会をはじめ、関係者の皆様方のご協力を賜り、この「茶山ポエム絵画展」が益々発展しますように努めてまいりますので、引き続きのご支援をお願いします。

「茶山ポエム絵画展」の審査に携わって思うこと

神辺美術協会 会長 石岡 洋三



菅茶山顕彰会の皆様方「茶山ポエム絵画展」に取り組みされて30年、また茶山記念館へと引き継がれて10年と長きにわたり努力されてこられたことに敬意を表します。

菅茶山先生が神辺の風景・風物を詠まれた漢詩のうち、12題をやさしく現代語に訳され、子ども達はその詩を読み・絵に表現することで想像力を養うことができていると思います。

この子ども達の絵の審査は長年、縄稚輝雄先生（日展画家）がされておられましたが高齢になられ、2016（平成28）年から神辺美術協会が担当することになりました。

神辺美術協会は現在7部門85人ですが、各部門の役員20名で審査しています。

最近では毎年3,200点余りの応募があり、審査方法は学年ごとに一斉に並べ、1次審査・2次審査と進めていきます。菅茶山記念館の展示スペースの関係もあり、毎年入選数は約500点です。その中から学年ごと優秀作品を選び、最優秀選考は役員全員の手上げ方式としています。

審査を担当して8年目を迎え、以前は時間がなく途中止めと思われる絵や、また綿やビーズなどを使用した貼り絵表現が多く審査に困りましたが、最近はしっかり描き込まれた絵が多くなってきました。

詩題では、夕日・ホテル・雪などのイメージが湧きやすいものや、詩が詠まれた場所に行っていないと描きにくいと思うものなどいろいろあります。

学校の授業時間だけでは描き足りない場合もあると思います。家でゆっくり菅茶山先生の想いに浸りながら描くのもいいかなと思います。

この茶山ポエム絵画展が菅茶山先生と子ども達をつなぐ一助となり、また創造力を育てるものになっています。

これからも、菅茶山顕彰会をはじめ、関係者の皆様方とともに、「茶山ポエム絵画展」がますます意義あるものに発展していくよう努めましょう。

●神辺のまんがもつくってくれんかのう

あれは、今から31年前のある夕方だったと思う。私のデザイン事務所に誠之館時代の同級生三宅真一郎君が訪ねてきて、こう言った。

「神辺のまんがもつくってくれんかのう。」

これが、茶山ポエム絵画展のはじまりだった。

私が最初に描いた福山の歴史まんがは、「福山の歴史 放浪の大名 水野勝成」だった。今から37年前（昭和60年）のことで、読むのが面倒な郷土史がまんがになったというので大人気となり、1万5千部を超えて売れた。

次につくったのは、鞆の浦の歴史を綴った「出逢いの海鞆の浦」だった。これも大人気となり、1万部近く売れた。このまんがは、鞆の町おこしの火付け役となった。

●タマゴが先かニワトリが先か

「まんが出版記念シンポジウム『今日から 鞆は面白い』」を開催した。

現実には面白いどころか、観光客ほぼゼロだった。市民は、鞆には食べるところも飲むところもないと言い、鞆の人は、客がこないで店つくっても商売にならないと愚痴っていた。

いわゆる、卵鶏論争である。卵が先かニワトリが先かは、何事かやろうというときの堂々巡りをいう。

私は、現実を変革するには「すでに良くなっている」の信念をもつことで道が開けるものだと思っていたので、「面白くしよう」という未来形ではなく、「今日から、鞆は面白い！」と現在完了のキャッチフレーズをつくった。

そして、この会場のステージ上で有志70名が「鞆を愛する会」を結成し、鉢巻きと揃いのTシャツ姿でこぶしを突き上げ、「今日から 鞆は面白い！」とシュプレヒコールをあげたのである。そして、「坂本龍馬いろは丸 検索」を始めた。これがテレビで全国に放送され、鞆は一気に知名度をあげ観光地へと変貌しはじめたのであった。

●茶山漢詩から茶山ポエムへ

「神辺のまんがもつくってくれんかのう」

三宅君の「神辺を何とかしなくては・・・」という言葉には、深い思いがあったと思う。彼は、『茶山詩三百首』などの参考文献を揃えてもってきてくれた。

『茶山詩三百首』は詳しく解説してあるので、労せず意味は理解できたが、外国語からの直訳だから感性を刺激しない。感動がない。詩のリズムもない。

このまんがは子どもも読む、子どもにも分かるやさしいリズムミクナ和言葉で意識しようという考えが浮かんできた。

最初に意識したのが「落日残光在」だった。イラストレーターに指示して絵を添えさせた。茶山詩六編を意識して絵をつけた。本は一年後に完成し、「茶山詩絵画展」をしたらどうかの声があがった。「そりゃ面白い」と思ったが、『茶山詩絵画展』は硬すぎて誰も応募しないよ。『茶山ポエム絵画展』としたらどうか」と提案した。

●わしの名を出さないでくれ

ところで、「神辺の歴史」初版のコストは五千部の印刷製本費と製作費を合計して七百万円かかっている。三宅真一郎君は、この金額を一円も値切らずポンと出した。しかも、「わしが出版したと書くな。『神辺を元気にする会』が出したとしてくれ」と言ったのである。謙虚の上に謙虚を重ねたような男だった。

惜しくも一昨年他界した。彼の名を記していただきたいと改めてお願いしておく。彼の「神辺のまんがもつくってくれんかのう」がなければ、『茶山ポエム絵画展』は存在していない。

30年経った今日思うことは、応募作品のレベルを上げていただきたい。このイベントを通して、将来神辺から一流詩人やアーティストを出そう。

町おこしには起爆点が要る。

今後は、廉塾の庭をいかに美しく面白くするか、講堂の使い方です。ミステリーローズではありません。神辺の町おこしは一流をめざそうではありませんか。